

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04821

研究課題名(和文)「教室内英語力評価尺度」を使用した英語授業改善と英語教師の専門的成長

研究課題名(英文) The use of classroom English-language proficiency benchmarks toward improving English lessons and professional development

研究代表者

中田 賀之(Nakata, Yoshiyuki)

同志社大学・グローバル・コミュニケーション学部・教授

研究者番号：40280101

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本科研プロジェクトにおいては、教室内英語力評価尺度を教員養成の授業や現職教師教育(教員研修・アクションリサーチ)において実際に活用し、英語授業改善や教師の専門性向上を促す取り組みを行なった。その成果を社会に公開し、尺度を活用していただくため、最終的に作成した複数の尺度およびその活用方法とともに、一連の事例研究の成果をホームページ上で公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本プロジェクトで開発された尺度は、実際に教師の英語授業改善や専門的技能の向上のために活用された事例をまとめたものであり、尺度とともに活用方法や事例がホームページで広く公開されている。高等学校ばかりでなく中学校の指導要領においても「英語の授業は英語で」と示されている今日、教師が個人だけでなく仲間と共に校内研修や自己研修などに取り組む上で参考になるものであり、その社会的意義は極めて大きいと言える。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we carried out several case studies of Japanese secondary school teachers who utilized classroom English-language proficiency benchmarks for their lesson improvement and professional development. On the website, we explained the details of several classroom English-language proficiency benchmarks and how to utilize them and reported the findings of these practitioners' case studies.

研究分野：応用言語学

キーワード：教室内英語 言語教師 気づき 専門的技能の開発 授業改善

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

第一次科研(H22-H24)では、英語授業で求められる英語力を可視化し、学習者の理解度という視点からその発達段階を捉えるための、教師用の評価尺度の開発を行った(Nakata, Ikeno, Naganuma, Kimura, & Andrews, 2012)。外部評価者によって用いられる「統合的診断尺度」に加えて、教師の自己省察のための「分析的自省尺度」、授業で遂行する言語機能に対応した「機能別尺度」、英語教師が行う言語活動別に英語力を記述した「タスク別尺度」の開発に取り組んだ。その成果は、様々な機会を通して発表されるとともに、講演・教員研修・免許更新講習等において幅広く活用されている。第二次科研(H26-H28)では、学習者の英語使用を促進させるため、学習者が使用する教室内英語自体を評価する学習者用の尺度の開発を試みている。このような尺度は、教師が「学習者の英語使用をいかに伸ばすか」を考える際の有効な手段となり得るとともに、学習者自身のメタ認知能力(教室内英語の「何がどの程度できているか」)を伸ばすことも期待され、教室内英語に関する教師と学習者の対話の道具ともなり得る。教師の教室内英語評価尺度と共に使用することで教師の長期的な専門的知識・技能の開発に繋がると期待される。第一次・第二次の科研を通して取り組んできた「教師用及び学習者(生徒)用の教室内英語力評価尺度の開発」による成果は、その使用方法が確立されて初めて生かされる。これまでの成果を継続・発展させるため、本科研では「教室内英語力評価尺度(教師用・学習者用)の活用を通じた英語授業改善&英語教師の専門家として成長」という仕上げ課題に取り組んだ。

### 2. 研究の目的

本研究は「教室内英語力評価尺度の活用を通じた授業改善事例集」を作成することを最終目標として、具体的に3年間で以下のことを実施する。

- (1) 英語模擬授業の評価において尺度を活用し、効果的な使用のあり方を検討する。
- (2) 教員研修等で英語授業を観察またはビデオ視聴し、教室内英語力評価尺度(教師用)を用いた評価を行い、効果的な使用方法を検証する。
- (3) アクション・リサーチにおける評価尺度の活用を行い、効果的な使用方法を検証する。

### 3. 研究の方法

本研究は、以下のようなステップを基本として行われた。

- (1) 英語での授業の目的及び授業力についての理論定義を行い、本研究の定義とその理論的背景、今後の調査の方法論的留意点を確認した。
- (2) 英語授業力の網羅的・具体的記述を伴う操作的概念規定を行った。
- (3) 関連の行動目標の習得状況を評価・測定するための尺度(能力記述文及び can-do リスト)を再検討した。
- (4) 香港の CLA, LPATE の評価に携わっている経験のある assessor 及び、その尺度を使用した教師に対しても聞き取り調査を実施し、尺度を実際に使用した場合の効果及び課題を確認した。
- (5) 研究協力者らが自身の授業を対象として同僚と一緒に、又は有志の研究会等で学習者の教室内英語尺度の使用した。
- (6) 尺度及びその活用方法と活用事例をホームページ上で公開した。

## 研究会合

年に3～5回程度の分担者会議または全体会議を開催した。非遠隔のためメール上でのやり取りを含めるとかなりの回数を重ねたことになるため、詳細は割愛することとする。

## 香港視察調査

香港の教室内英語評価尺度(CLA)の評価者及び助言者でもある香港教育大学のDr. Clairline Chanを訪問し、香港の教室内英語評価尺度(CLA)が使われている学校現場を訪問しCLAを活用した授業改善の可能性について聞き取り調査を行なった。

## 4. 研究成果

上述の研究目的を達成すべく、本科研の研究成果は以下の論文、口頭発表・シンポジウムなど様々な形で公開され、開発した尺度及び活用用法と活用事例をホームページ上で公開した。このような尺度及びその活用事例は、教師にとっては「学習者の英語使用をどのように伸ばすべきか」を考える際のより具体的な材料を提供してくれ、学習者にとっても自身の教室内英語(「何が、どの程度できているか」)についてのメタ認知能力を伸ばすことを支援してくれる道具となり得るため、結果として学習者の教室内英語使用の更なる促進につながると考えられる。

### [論文]

(1) Nakata, Y., Ikeno, O., Kimura, Y., Naganuma, N., & Andrews, S. (2018).

“Assessing Japanese teachers’ classroom English “internationally” : Implications for the development of classroom English language benchmarks in Japan” *Language Testing in Asia*, 8(15).

This study aims to develop a low-stakes assessment tool to establish a classroom English language benchmark that Japanese teachers of English can use for their own professional development purposes. To start with, we describe the differences between CLA (Classroom Language Assessment) in Hong Kong and the IDS (Integrative Diagnostic Scale) in Japan with regard to agenda, characteristics, and implementation. Then, we report findings made from both of these assessment types and from a group discussion we had in order to clarify the rationale behind the CLA experts’ assessment.

(2) 池野修・木村裕三・中田賀之・長沼君主 (2019)「教室内英語力」評価尺度を活用した英語教師教育 模擬授業における教師英語の省察『大学英語教育学会中国・四国支部紀要』第16号, pp. 1-17.

本研究は、「統合的診断尺度」を教職課程で活用し、活用者の認識の変化を調べた事例研究である。「英語科教育法」での模擬授業(全9回)における英語使用を対象として、受講生が同尺度を活用して評価活動を行った。その結果、受講生の「英語教師に求められる英語力」に対する考えには大きな変化が見られた。尺度の活用は、言語使用に焦点化した、分析的省察を促し、具体的には、英語資格試験の視点は希薄になり、生徒の理解状況に合わせて英語使用を調整する力や生徒と効果的にインターアクションを行う力などの重要性が強く認識されるようになった。本論文では、教師教育において教室内英語力評価尺度を継続的に活用する意義やその具体的方法についても論じている。

- (3) 興津紀子 (2021) 「教室内英語力評価尺度を使用した中学校英語授業改善」科研成果報告  
(教室内英語評価尺度活用マニュアル)

生徒の実態把握，教員の指導の振り返りのためのツールとして「教室内生徒英語力評価 尺度」を，教師英語の診断や振り返りのためのツールとして「教室内教師英語力評価尺度」を複数の勤務校において使用した。本稿では，教室内生徒英語力評価尺度を使用した同一生徒の自己評価の推移を 2 年間観察し，授業計画や授業改善にいかに関与したか，またその 2 年間で「教室内教師英語力評価尺度」を使用し，教師英語に対してどのような気づきがあったかについて詳述している。

- (4) 村上ひろ子 (2021) 「機能別尺度と内省的分析尺度を使用した教育実習生の指導例」科研成果報告 (教室内英語評価尺度活用マニュアル)

本研究は、英語の授業は英語で行うことを教育実習生に指導する上で「教室内英語力評価尺度」の活用法を研究することをねらいとし、公立高校国際科 1 年生の授業で教える教育実習生が教室内英語力評価尺度の活用事例についての実践報告である。

- (5) 教室内英語力評価尺度活用マニュアル

(<https://www1.doshisha.ac.jp/~yonakata/achievement.html>)

本ホームページでは、作成した教室内英語力評価尺度、香港 LPATE、尺度活用フォローチャート、成果報告書などが提示されており、教師が校内研修や自己研修において英語での授業の改善するための資料として活用することが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 池野 修, 木村 裕三, 中田 賀之, 長沼 君主	4. 巻 16
2. 論文標題 「教室内英語力」評価尺度を活用した英語教師教育 模擬授業における教師英語の省察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoshiyuki Nakata, Osamu Ikeno, Yuzo Kimura, Naoyuki Naganuma, & Stephen Andrews	4. 巻 8(15)
2. 論文標題 Assessing Japanese teachers' classroom English "internationally": implications for the development of classroom English language benchmarks in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Language Testing in Asia	6. 最初と最後の頁 なし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s40468-018-0067-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長沼君主, 中田賀之, 木村裕三
2. 発表標題 「教室内での生徒の英語を引き出す教師英語力を考える ~ 教室内教師・生徒英語力評価尺度の活用 ~」
3. 学会等名 関西英語教育学会2019年度 (第24回) 年次大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中田賀之, 池野修, 木村裕三, 長沼君主, 永末温子, 村上ひろ子, 興津紀子
2. 発表標題 「教室内英語力評価尺度」を使用した英語授業改善と英語教師の専門的成長
3. 学会等名 言語教育エキスポ2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長沼君主、永末温子
2. 発表標題 教室内生徒英語Can-Do尺度に基づく生徒英語の縦断的变化と生徒の英語使用を引き出す教師の言語調整
3. 学会等名 全国英語教育学会第44回京都研究大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

教室内英語力評価尺度活用マニュアル・ホームページ <a href="https://www1.doshisha.ac.jp/~yonakata/">https://www1.doshisha.ac.jp/~yonakata/</a>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	長沼 君主  (Naganuma Naoyuki)  (20365836)	東海大学・国際教育センター・教授   (32644)	
研究分担者	池野 修  (Ikeno Osamu)  (70294775)	愛媛大学・教育学部・教授   (16301)	
研究分担者	木村 裕三  (Kimura Yuzo)  (80304559)	富山大学・学術研究部医学系・教授   (13201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------